

現代語・古代語の指示副詞をめぐって

岡崎友子

キーワード：コウ・ソウ・アア，カク・サ，副詞的用法，場面制約

1. はじめに

現代日本語では表1に示すように「コレ・ソレ・アレ」等の指示代名詞と平行して、「コウ・ソウ・アア」等の様々な指示副詞が存在する。

表1 コソアの分類（現代日本語）

品詞	コ系	ソ系	ア系
代名詞	コレ・ココ・コッチ	ソレ・ソコ・ソッチ	アレ・アソコ・アッチ
連体詞	コノ・コンナ	ソノ・ソナ	アノ・アンナ
副詞 ¹	コウ・コノヨウニ コウヤッテ・コウシテ コンナ風ニ コウイウ風ニ	ソウ・ソノヨウニ ソウヤッテ・ソウシテ ソナ風ニ ソウイウ風ニ	アア・アノヨウニ アアヤッテ・アアシテ アンナ風ニ アアイウ風ニ

現代日本語に比べ、古代日本語（平安時代，794～1085）においては、表2で示すように指示副詞は2系しか存在せず、さらに指示副詞のバリエーションも非常に少ない。

表2 コソアの分類（古代日本語：平安時代）

	コ系列	ソ系列	カ系（ア系）
代名詞	コレ ココ コナタ	ソレ ソコ ソナタ	カレ（アレ） カシコ（アシコ） カナタ（アナタ）
連体詞	コノ	ソノ	カノ（アノ）

	カク系列	サ系列
副詞	カク（カウ） カヤウニ	サ（シカ） サヤウニ

上記の表1と表2から次の疑問点が指摘できよう。

- （1） 現代語のコ・ソ・ア系における、それぞれの指示副詞（コ系なら「コウ・コノヨウニ・コウヤッテ・コウシテ・コンナ風ニ・コウイウ風ニ」）には用法の違いがあるのか。もし、あるならどのようなものか。
- （2） 古代語の指示副詞は現代語と比べ系列が少なく（カク系列・サ系列の2系のみ）、さらに語のバリエーションも乏しい。では現代語で見られるようなそれぞれの対象に対して指示は、どのように行われていたのだろうか。
- （3） 指示副詞はいつ、どのように2系列から3系に変化し、また、なぜ指示副詞各系列

¹ 現代語のコ・ソ・ア系における「コレホド・コレダケ」等、また古代語の「カ（カク）バカリ・サバカリ」等の程度専用に用いられる指示副詞については、本論は対象外としている。

のバリエーションも増えたのであろうか。

本論では上記3点の疑問に対し、第2節で疑問点(1)の現代語の指示副詞の用法に関する仮説、第3節で疑問点(2)の古代語における指示副詞の用法の考察、そして第4節では疑問点(3)である指示副詞の歴史的変遷の素描及び、変化の構造に対する私見を述べる。なお、本論では紙幅の関係上、「カク→カウ→コウ」「サ→サウ→ソウ」と歴史的に変化してきた「カク・サ」(古代語)「コウ・ソウ・アア」(現代語)の副詞的用法を中心に考察を行っていく。

2. 現代日本語の指示副詞

2.1 指示用法(直示、照応及び観念用法)について

現代語の指示副詞は以下に示す直示、照応及び観念用法を持つ。

●直示用法…今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象があるもの。

(4) 浅づけもそう切ったのは、うまくなし (佐久間, 1966, p.25 より)

●照応用法…先行する言語テキスト内に当該の指示表現と指示対象を共有する先行詞があるもの。

(5) 「いや、きょうはやめにしよう。おや！」トックはこう叫ぶが早いか、しっかり僕の腕を掴みました。 (河童・十 p.354)

●観念用法²…言語テキスト内に先行詞もなく、今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象のないもの。

(6) 「田中君はあまり人に好かれてませんねえ」

「ええ、ああ人の悪口を言うようじゃ、誰も寄りつきませんよ」

現代語の指示代名詞と指示副詞は両者とも、コ系が直示・照応用法、ソ系が直示・照応用法、ア系が直示・観念用法を持つ。なお、指示副詞の指示用法に関しては岡崎(2002)において考察をおこなっており、本論ではこれ以上詳しくは述べない。

2.2 副詞的用法について

現代語の指示副詞には、以下の副詞的用法が見られる。

(7) 動作・作用の様態を表す用法

バットは(そう/そんな風に/そうして/そうやって)持つではありません。

(8) 言語・思考・認識活動の内容を表す用法

あのときはああ言ったけれど、今は考えが変わったんだ。

(9) 程度の大きさを表す用法

「暑いですね」「ええ、暑いですね。こう暑いと、勉強はかどりませんね」

(以上の例は金水・木村・田窪 1989 より、ルビは省略した)

結論を一部先取りして述べておくと、現代語の指示副詞はその副詞的用法から、以下の表3に示すA・B・Cの3類に分類することができると考えられる。そしてA・B・C類は、それぞれ表3に示す用法を持つ。

² これまでの多くの研究では、ア系に照応用法が認められてきたが、本論は金水(1999)の「一般に、アの文脈照応用法と呼ばれるものは、すべてこの記憶指示用法である」(p.72)と同じ立場に立つものであり、ア系の照応用法はすべて観念用法とする。

表3 現代語の指示副詞の用法

	現代語の指示副詞類	動作様態	言語内容	程度
A	コウ・ソウ・アア	△	●	●
B	コウヤッテ・ソウヤッテ・アアヤッテ コウシテ・ソウシテ・アアシテ	△	×	×
C	コンナ風ニ・ソンナ風ニ・アンナ風ニ コウイウ風ニ・ソウイウ風ニ・アアイウ風ニ コノヨウニ・ソノヨウニ・アノヨウニ ³	●	●	×

注：本論における表の見方については以下の通り

動作・作用の様態を表す用法→動作様態，言語・思考・認識活動の内容を表す用法→言語内容
程度の大きさを表す用法→程度，●…用法有り，△…用法はあるが使用に偏り，×…用法無し

では、指示副詞「コウ・ソウ・アア」を中心に各副詞的用法について考察をおこなう。

2.3 動作・作用の様態を表すコ系・ソ系・ア系の指示副詞について

動作・作用の様態を表す用法とは、A・B・C類の指示副詞が「走る・持つ」等の動作動詞、またA・C類が「なる・曲がる」等の結果動詞に係り、その動詞の表す動作・作用の様態や、動作・作用の結果、現れた変化の様態を表す用法である。

- (7) バットは（そう/そんな風に/そうして/そうやって）持つではありません。
(再出)

ただし、A類の「コウ・ソウ・アア」には使用される場面に制約があると考えられる。この場面の制約については岡崎（1999b）で、以下のような作業仮説を提出した（岡崎1999bでは「コウ」についてのみ）。

(10) 「コウ」の使用場面の制約仮説

「コウ」は {1} {2} の場面でしか用いることができない。

{1} 発話者（A）の動作・作用、または眼前の他者（B）の動作・作用を直接指示しながら、その動作・作用の様態そのものの説明・分析を行う。

{2} 発話者（A）の動作・作用、または眼前の他者（B）の動作・作用の結果現れた変化の様相そのものの説明・分析を行う。

（説明・分析＝「動作・作用の仕方・なされ方」「動作・作用・変化のありよう」等を聞き手に教えたり、解説したりすること。）

(11) a. 説明・分析の場面：（ガラス工芸教室。先生が溶けたガラスを吹きながら）

ガラスを（こう/こんな風に）吹くと、吹いた部分が虹色になります。

b. 説明・分析ではない場面：（外を歩きながら）

暖かい風が（??こう/こんな風に）吹くと、春がそこまで来ているのを感じる。

³ ただし「コノヨウニ・ソノヨウニ・アノヨウニ」に関しては、口語ではおさまった場面以外では用いられにくい。

⁴ A類の実際の使用を調査してみると小説等の文章にはその例は少なく、料理番組等の口語における説明・分析の場面で用いられていることが多い。

（玉ねぎと紅しょうがと小麦粉を）今度はね。よくこう混ぜてね。いきますね。

（きょうの料理 2002.6.13）

⁵ なお上記（10）の仮説は、金水・木村・田窪（1989 p57）「こう/そう/ああは、眼前の動作を直接指示しながらその様態そのものの説明・分析を行うときだけに用いる。」という指摘に影響を受けたものである。

また、A類がこのような場面でしか用いられにくいことについては、次の(12)～(14)からも指摘できる。この(12)～(14)に示した動詞は、発話者が直接指し示して説明・分析する対象とはなりにくい為に、A類の指示副詞とは合いにくいと考えられる⁶。

- (12) A類は「暮らす・住む・通勤する」等の一時的な動き・変化を表していない動詞には係りにくい。

例：(通勤ラッシュのニュースを見ながら)

父さんも毎朝(*ああ/あんな風に/ああやって)通勤してるんだ。

- (13) A類は「(風が)吹く・(日が)暮れる」等の無意志的な自然現象を表す動詞には係りにくい。

例：晴れた日は(*こう/こんな風に)風に吹かれて歩くのも悪くないね。

- (14) A類は「意地を張る」等の外的な様態⁷のみでなく、内的情態でも特徴づけられている動詞にはかかりにくい。

例：(ぷいと横を向いて、一言も話さない妻に対し、夫)

いつまでも(そう/そんな風に/そういう風に)意地を張ってちゃ、何も解決しないよ。

(→この場合の「ソウ」は程度を表す。2.5節へ)

次に、上記(10)の仮説は「コウ」のみでなく「ソウ・アア」にも当然適応すると考えられる。

- (15) 説明・分析の場面：(マナー講座で。講師が座り方の見本を見せた後、生徒に座らせる)

講師「違います。(そう/そんな風に/そうして)座っちゃ駄目です！」

- (16) 説明・分析ではない場面：(公園の仲の良いカップルを見て、夫婦が)

昔はベンチに何時間も(*ああ/あんな風に/ああして)座って、将来の夢を話したね。

そこで以下に示すように(10)の仮説を修整する。

- (17) A類「コウ・ソウ・アア」の使用場面の制約仮説

「コウ・ソウ・アア」は、主に以下の場面において用いられる。

<対象A>の動作・作用の様態、または<対象A>の動作・作用の結果現れた変化の様態

そのものを直接、身体的指示動作(指・視線・体の動き等で対象を指し示す動作)で示しながら説明・分析する場面。

なお「コウ・ソウ・アア」は、以下のように使い分けられる。

- <対象A>が発話者自身、及び眼前の他者である場合…「コウ」
- <対象A>が少し離れた場所に位置する他者である場合…「ソウ」
- <対象A>が遠く離れた場所に位置する他者である場合…「アア」

⁶ これらの動詞でも、説明・分析の場面を想定すれば可能となる場合がある。

⁷ 「意地を張る」等の動詞は、本論では言語思考活動動詞に分類され、A類には主に2.4節で扱う言語・思考・認識活動の内容を表す用法に用いられる。但し、「思う・言う」等の言語思考活動動詞と違い、「意地を張る」等の動詞は、内的な情態を表すだけでなく、外的に現れる様態も含むためA類以外のB・C類なら動作・作用の様態を表すことができる(本論(14)例の「そうやって/そんな風に」は動作・作用の様態を表している)。

実際のA類の使用を観察すると、上記(17)で示すように発話者はA類を発話する際に、身体的な指示動作(指・視線・体の動き等で対象を指し示す動作)を伴うことが多い。

そして、そのような強い指示動作は、発話者が対象をより強く聞き手に差し出しているとみえる。その結果、聞き手はその発話自体を、発話者が説明・分析する為に行っていると解釈するのである。

そこで本論では、A類のこのような性質を以下の(18)としてまとめておく。

(18) A類「コウ・ソウ・アア」の性質

発話者はA類で対象を指示することにより、他の指示副詞による指示よりも聞き手に、その対象をより強く示す(いわば聞き手の目の前に差し出すような)ことができる。

この(18)のA類の性質は、本節の動作・作用の様態を表す用法だけでなく、程度用法からも導きだすことができる。それについては2.5節で詳しく考察する。

最後にB・C類については、A類のような場面制約はない。しかしB類については金水・木村・田窪(1998)で指摘するように、動作の様態を表すことができるが、動作・作用の結果現れる変化の様態、及び無意志的な作用の様態を示すことはできない。

(19) 西風が(*こうやって/こんな風に)吹いてくるときは、雨になることが多い。

(金水・木村・田窪 1998, p.58)

このようにB類が無意志的な作用の様態を示すことができないのはA類と類似する。しかしA類はB類と違い(17)を満たしていれば、動作・作用の結果現れる変化の様態を示すことができ、またB類にはA類のような場面の制約も見られないことから、その本質的な性質はかなり相違すると考えられる。これについては更なる考察が必要であり、今後の課題としておきたい。

2.4 言語・思考・認識活動の内容を表すコ系・ソ系・ア系の指示副詞について

現代語のA・C類は、金水・田窪・木村(1989, p.61)で「[「発言・思考を表す動詞」を修飾すると、発言・思考の内容を表す」と指摘するように、「言う・思う」等の動詞にかかるそれらが表す言語・思考・認識活動の内容を表すことができる。なおB類はこの用法を持たない⁸。

(20) 「おはよう」ー誠は、(そう/そんな風に/*そうやって/*そうして)言った。

しかしA類及びC類の指示副詞はこの用法において、まったく同一の働きをするわけではなく、また「発言・思考を表す動詞」についても捉えなおす必要がある。

まず、この用法におけるA類「コウ・ソウ・アア」以下のように規定する。

(21) A類「コウ・ソウ・アア」は以下で示す藤田(2000)の第I類の引用構文で用いられる動

⁸ 金水・田窪・木村(1989)で「コウヤッテ・ソウヤッテ・アアヤッテ」は、言語・思考を表す動詞に用いられると動作の様態を表す(p.61)と指摘する。また金水・田窪・木村(1989)では「コウシテ・ソウシテ・アアシテ」に関しては記述がないが、これらの指示副詞に関しても言語・思考・認識活動の内容を表す用法はない。

詞（句）⁹に係る場合に、その動詞の表す言語・思考・認識活動の内容を表すことができる。

本論ではこれを、総称して言語思考活動動詞と呼ぶ。

言語思考活動動詞… 言う・思う・意地を張る・叫ぶ・主張する・宣言する
声をひそめる・後悔する・心配する・感謝する等

(20) ‘「おはよう」一誠は、そう言った。(藤田 2000, p.203 より)

なお、岡崎（2002）で指摘したがA類は、カク系列「カク」からコ系「コウ」へ、サ系列「サ」からソ系「ソウ」へと歴史的に変化してきた過程において、カク系列・コ系はどの時代においてもこの用法が多く見出され、またサ系列・ソ系はこの用法が常に主用法である。また、2.3節の動作・作用の様態を表す用法で見られた制約等もなく、歴史的に比較的安定した用法であるといえる¹⁰。

次に、C類についても上記の言語思考活動動詞にかかると、言語・思考・認識活動の内容を表すことができる。

しかしA類と違い、言語思考活動動詞の中でも「叫ぶ・意地を張る」等のように内的な情態のみでなく外的様態も含む動詞（句）になると、例（23）aのようにその動詞（句）の表す動作の（外的）様態を示すことがある（→2.3節）。さらに興味深いことに「コウ・ソウ・アア」がそれらの動詞（句）についた場合には、例（23）bのようにそれらの表す情態の程度を示すことができる。

言語・思考・認識活動の内容

(22) 「もう彼女のことなんて、どうも思っていないよ」

一誠が（そんな風に/そういう風に）意地を張ってたよ。

(23) (ぶいと横を向いて、一言も話さない妻に対し、夫)

a. 動作の様態

いつまでも（そんな風に/そういう風に）意地を張ってちゃ、何も解決しないよ。

b. 程度

いつまでもそう意地を張ってちゃ、何も解決しないよ。

上記の（23）a「ソナ風ニ/ソウイウ風ニ」と同じく動作の（外的）様態を示しているとも言える（23）bの「ソウ」が程度性を示すのは、実は2.3の（18）でまとめたA類の性質によるものである。これについては次の2.4節で詳しく考察していく。

2.4 程度を表す「コウ・ソウ・アア」について

現代語の指示副詞の中でA類の「コウ・ソウ・アア」のみ、形容詞（形容動詞）及び連用修飾

⁹ この第I類の動詞（句）とは藤田（2000）で、「引用句『～ト』に示される発話・思考と述部の表す行為とが事実レベルで等しい関係で結びつく構造」、第II類とは、「引用句に示される発話・思考と述部の表す行為とが、同一場面共存の関係で結びつく構造」とするものである。例をあげておく。

第I類 (1) 誠は、おはようと言った。 第II類 (2) 誠は、おはようが入ってきた。

なお、本論では「第I類の引用構文で用いられる動詞（句）」を「言語思考活動動詞」と呼ぶこととする。

¹⁰ この用法において、(18) に示したA類の性質があまり色濃く見出せないのは、歴史的に安定した用法である為とも考えられる。

語等にかかり、それらが表す性質や状態の程度が大きいことを示すことができる。

- (9)「暑いですね」「ええ、暑いですね。こう暑いと、勉強はかどりませんね」
(金水・木村・田窪, 1989, p.68, ルビ省略)(再出)
- (24)「何だこれは」「講義を筆記するのが厭になったから、いたずらを書いていた」
「そう不勉強ではいかん。」(三四郎 p.132)
- (25)「子錦って、大きいね」「うん、ああ大きくては、家に入るときも一苦労だろうね」
(金水・木村・田窪, 1989, p.68, ルビ省略)

また、金田一(1950)の第一種の状態動詞¹¹「(英語の会話が)できる・(このナイフはよく)切れる・(親爺はなかなか)話せる」等や、第四種の動詞「すぐれる・ずばぬける・似る」等にかかる場合にも、それらが表す状態や性質の程度が大きいことを表す。

- (26)親爺がこう話せるとは、思わなかったよ。
- (27)田中君と親爺さんに会ったよ。ああ似ている親子は、今まで見たことがない。

さらに工藤真由美(1995)において内的情態動詞¹²とする「期待する・いらいらする」等にかかる場合にも程度を表すことができる。この内的情態動詞とは形容詞(形容動詞)と同様に典型的なアスペクト対立が実現しない語であり、本論の言語思考活動動詞にあたる。(但し、内的情態動詞の中でも「思う・考える」等の場合には程度は表せない)

- (28)「では、この薬の開発により、どんな病気でも治るということですね!」
「そう期待されても、困るなあ。まだ研究段階なんだから」

上記に示したようにA類「コウ・ソウ・アア」は、「とても・非常に・かなり」等と同じように状態性の意味を持つ語にかかり程度を表すことから、程度副詞の側面を持っているといえる。程度副詞とは、工藤浩(1983)等において「(相対的な)状態性の意味を持つ語にかかって、その程度を限定する副詞」と一般的に考えられているように¹³、程度副詞と状態性とは非常に関連があると思われる。

しかしA類「コウ・ソウ・アア」は以下のように、動詞自体は状態性を持たない動詞である「広がる・温まる」等にかかる場合にも、程度の大きさを表すことがある¹⁴。

¹¹ 状態動詞である「ある」にかかる場合には、程度を表さない。但し、「男はこうあれ」のように命令形に用いることができることから、他の状態動詞とこの場合の「ある」を同分類の動詞とすることは出来ないであろう。またこれについては「かくあるべき・かくあれ」等の慣用表現の影響とも考えられる為、歴史的考察の章で詳しく述べていきたい。

何か大きな力が働き、自分がこうありたいと思う場所に、風のように攫っていつてはくれないだろうか
(不機嫌な果実 p.263)

¹² 内的情態動詞とは、工藤(1995)で「運動動詞＝外的事象動詞と異なり、〈思考・感情・知覚・感覚〉という人の内的事象をとらえている。」(p.70)とするものである。

¹³ もちろん、程度副詞といってもその種類多く、性質(かかる語や意味等)も一様ではない。そしてさらに、状態性を持つ語についても明らかな規定はなされていない。

¹⁴ 金水・木村・田窪(1989)では、「コウ・ソウ・アア」が形容詞・連用修飾語を修飾して程度を表す場合について指摘があるが、動詞にかかる場合については述べられていない。

(29) (マラソン中継をみて)

いくら高橋選手でも差がああ広がると、挽回は不可能だよね。

この「広がる・温まる・割れる」等の動詞は、いわゆる主体変化動詞と呼ばれる動詞群であるが、主体変化動詞と程度副詞の共起問題を扱った論考に佐野（1988）がある。佐野（1988）では進展性¹⁵を伴う主体変化動詞（これを[+進展的变化]動詞句と呼んでいる）にかかる場合にのみ、程度副詞は程度の大きさを表すことができるとする。

[+進展的变化]動詞句：広まる、上がる、温まる、冷える、太る、痩せる、老ける
（日が）暮れる、溶ける、治る、腐る

(30) [+進展的变化]動詞句

体が（だいぶ/かなり/少し/非常に/とても）温まった。

(31) [-進展的变化]動詞句

a (*非常に/*とても) 寝た。

b (だいぶ/かなり/少し) 寝た。(時間量)(程度の解釈不可) (佐野 1988 より)

A類「コウ・ソウ・アア」についても、上記の程度副詞と同様の働きをする。

[+進展的变化]動詞句 … 程度が大きいことを表す

(32) 朝もこう冷えると、起き辛くて仕方ない。毎日、遅刻しそうだよ。

(33) (原発修理の後)「第3号基は、かなり危険な状態だったな」

「ええ。まさか連結部分が、ああ傷んでいるとは。驚きましたよ。」

[-進展的变化]動詞句 … 程度は表していない

(34) ??いくら休みでもこう寝ると、頭が痛くなっちゃうよ。(時間量)

(35) ?辰巳が常識問題で、ああ間違えるなんて、思ってもみなかったよ。(数量 or 内容)

佐野（1988）で指摘するように、この進展性を伴う主体変化動詞には漸次的な変化の過程があるため、変化前と変化後の状態の差である「変化の度合い」や、漸次的に累加される「結果状態の程度性」¹⁶が存在する。そしてA類「コウ・ソウ・アア」も「だいぶ・非常に」等の程度副詞と同じく、それらを示すことにより程度を表しているといえる。

しかし語彙的に意味をもつ「だいぶ・非常に」等の程度副詞による程度の示し方と、いわば指

¹⁵ 進展性とは佐野（1998）において、動詞の表す変化が進展的・漸次的に進むことを指す。これらの動詞は、「だんだん（しだいに）～してくる/～していく/～しつつある」等の形式をとれるものである。本論には進展性を伴う動詞句をあげたが、以下に参考として進展性を伴わない動詞句をあげておく。

[-進展的变化]動詞句：死ぬ、割れる、(モノが)落ちる、生まれる、結婚する、(人が)座る

¹⁶ 佐野（1988）の「結果状態の程度」と「変化の度合い」については、

(1) 非常に天気がよくなった。(結果状態の程度)
*非常に天気がよくなったが、まだ天気がいいとはいえない。

(2) だいぶ天気がよくなった。(変化の度合い)
だいぶ天気がよくなったが、まだ天気がいいとはいえない。

のように、「結果状態の程度」とは変化後どの程度になったか、また「変化の度合い」とはどの程度変化したのかを表すものとする。

し示すという機能のみで語彙的に意味をもたない指示副詞による程度の示し方は、当然であるが根本的に相違する。

では、このA類「コウ・ソウ・アア」はどのようにして程度を表しているのでしょうか。

それは先に述べたが、このA類による程度用法は（18）で示したA類の性質である強い指示行為によって副次的に生み出されたものと考えられる。そもそものA類が程度を表す用法と、2.3節のA類が動作・作用の結果の状態を示す用法は、基本的に結果の状態を示すという点で何ら差はない。

では、これらの意味の違いはなぜ現れるのでしょうか。

これについては2.3節で指摘した（18）のA類の性質である強い指示行為によって、取り上げられ強調される側面の相違から起こるものと考えられる。つまり、「切れる・割れる」等の進展性を伴わない動詞に関しては、結果の状態に程度性がないためにA類「コウ・ソウ・アア」で指し示した場合、その変化結果の様態を聞き手に強く差し出すということになり、その行為自体が説明・分析の為と解釈される。

それに対し進展性を伴う「広がる・温まる」等の動詞に関しては、それらの表す変化結果の状態に程度性が存在する為、A類で指し示した場合にはその強い指示により、その状態そのものだけでなく、それらの持つ程度性も強調される。そしてそれは発話者が程度の大きさも示しているのだと、聞き手に解釈されるのである。

また、本論ではこれ以上深く述べないが、程度性はないが、いわば回数読みができる動詞に関しては以下のように、数量が大きいことを表す場合があると考えられる。これについてもA類で強く指示することによって、その動詞の持つ回数性が強調されたものと思われる。

（36）学校の方はどうかこうか無事に勤まりそうだが、こう骨董責に逢ってはとても長く続きそうにない。（坊ちゃん p.27）

以上述べたようにA類は、（18）の強い指し示しといった性質から程度を表すことができる。それに対しB・C類はこの性質を持たない為に、当然A類のように程度を表すことはできない。2.3節において、動作・作用の様態を表す用法の場面制約から導きだされたA類の（18）の性質はまた、この程度用法からも導き出せるのである。

また、このA類「コウ・ソウ・アア」の程度用法については、否定と呼応する「ソウ～ナイ」の問題がある。これについては今後の課題としておきたい。

3. 古代語の指示副詞について

次に、古代語の指示副詞について述べる。

古代語（平安時代）において指示副詞は、先の表2で示したカク・サ系列の2系列しか存在せず、また、カク系列には「カク（カウ）・カヤウニ・カク（カウ）サマニ」、サ系列には「サ・サヤウニ」とバリエーションも少ない（但し「カク（カウ）サマニ」は、あまり見出せない¹⁷⁾）。

では、次節以降で古代語（平安時代）の各副詞的用法について詳しく見ていくこととする。

¹⁷⁾ 上代から見出せる「カク（カウ）サマニ」には、中古から現れだした「カヤウニ」に勢力を奪われていったものと考えられ、あまり多くは見られない。以下に、例をあげておく。

「晴れまじらひしたまはん女などは、えはえしめぬかな。源中納言は、かうざまに好まうはたき匂はさで、人柄こそ世になけれ」（源氏・紅梅）（薫はこういう風に風流がってたきおわすというのではなく、生得の香りだ）

3.1 動作・作用の様態を表す用法

古代語（平安時代）の指示副詞における動作・作用の様態を表す用法について、現在の調査でこの用法が見出せるのはカク系列「カク（カウ）・カヤウニ」である。

(37) 里分かぬかげをば見れど行く月のいるさの山を誰かたづぬる「かう慕ひ歩かば、いかにせさせたまはむ」（源氏・末摘花 p.272）（私がこう付け回したら）

(38) ひとつ方に思ししづまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも心のみ尽きぬべきこと（源氏・葵 p.34）（こうして君のお越しをお待ちしているというもの）

また、(12)～(14)にあてはまると考えられる動詞に係る「カク（カウ）」も多く見出せる。

(39) わが身ひとつにより、親兄弟、片時たち離れがたくほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、
かくまどひあへると思すに、いみじくて（源氏・須磨 p.199）
（家郷を棄ててきて、（一緒に）こうして彷徨ってしてくれる）

(40) ただ今も渡りたまはなんと待ちきこえたまへど、かく暮れなむに、まさに動きたまひなんや。（源氏・真木柱 p.373）
（こうして日も暮れようとしているのに、どうしてお離れになるはずがあらう）

(41) 女房など、「あやしく、何ごとならん。穢らひのよしのたまひて、内裏にも参りたまはず、またかくささめき嘆きたまふ」とほのぼのあやしがる。（源氏・夕顔 p.177）
（こうしてひそひそ話をして悲しんでいらっしゃる）

以上の(39)～(41)の「カク（カウ）」も含め、古代語の動作・作用の様態を表す用法におけるカク系列「カク（カウ）」を観察する限り、2.3 節で示した現代語の(17)のような場面制約は見られず、古代語のカク系列は(18)のような性質は持っていなかったと予想できる¹⁸。

このようにカク系列「カク（カウ）」は、現代語の指示副詞のA・B・C類でそれぞれ示していた対象を、広く指示していたと考えられる。それはまた、古代語における指示副詞のバリエーションの少なさを「カク（カウ）」で、いわば補っていたとも言えるであろう。

3.2 言語・思考・認識活動の内容を表す用法

古代語（中古）において言語・思考・認識活動の内容を表す用法は、カク系列「カク（カウ）・カヤウニ」、サ系列「サ・サヤウニ」とすべての指示副詞に見出せる。

(42) 「さぶらひつれど仰せ言もなし、暁に御迎へに参るべきよし申してなん、まかではべりぬる」と聞こゆ。このかう申す者は、滝口なりければ（源氏・夕顔 p.165）

¹⁸ なお岡崎（2002）で指摘したが、中古の「カク」は副詞用法のみでなく、指示領域についても現代語の「コウ」とかなり相違する。以下の例のように、「カク」は現代語「ソウ」の指示領域も示す。おとなおとなしき御前の人々は、「かくな」など言へど、えとどめあへず。（源氏・葵 p.22）（そんな風に（乱暴）するな）

(43) 「いとなやましくはべれば、心やすき方にためらひはべる」とあり。御乳母、「さ聞こえさせはべりぬ」とばかり（源氏・若菜上 p.70）（そう申し上げました）

(44) その後、物など多く受け取りてなん急ぎ造りける。かやうに思ひよるらんとも知りたまはで、上らむことをもの憂がるも心得ず思し（源氏・松風 p.400）
（（入道が）このように考え付いていようとも（源氏は）ご存知なく）

(45) 姫宮にも、中の戸開けて聞こえむ。かねてよりもさやうに思ひしかど、ついでなきにはつつましきを（源氏・若菜上 p.87）（姫宮にも中の戸を開けてご挨拶申し上げましょう。かねてからそうそのように思っておりましたが）

以上のように指示用法（照応・直示・観念用法）の相違を除けば¹⁹、言語・思考・認識活動の内容を表す用法においては、古代語「カク・サ」と現代語「コウ・ソウ」にはあまり大きな相違は見られない。他の用法に比べ歴史を通じて、比較的安定した用法であったと言える。

3.3 程度用法

古代語ではカク・サ系列に「カク（カウ）」「サ」+「バカリ」で「カバカリ（カクバカリ）」「サバカリ」という、程度を示す指示副詞が存在する。現代語であれば「コレホド・コレダケ・コレクライ」等のように、指示代名詞「コレ・ソレ・アレ」+「ホド・ダケ・クライ」で表されているものである。なお現代語の指示副詞「コウ・ソウ・アア」には、「ホド・ダケ・クライ」は直接付かない。

(46) もの馴れて見えたてまつらむも恥づかしく推しはかられたまふに、ただかばかり思ひつめたる片はし聞こえ知らせて（源氏・若菜下 p.225）（これほど思いつめた心）

(47) ひとつ御腹ならねばいとうとうとしく、宮の内いとかすかになりゆくまに、さばかりめでたき人のねむごろに御心を尽くしきこえたまへば（源氏・朝顔 p.488）
（あれほどご立派な（源氏の大臣のような）人が）

但し古代語では、以下の（48）のように「カク（カウ）」が程度を表していたのではないのかと考えられる例が見られる²⁰。

¹⁹ 指示用法においては現代語のコ系・ソ系とは相違する。まずサ系列には現代語のソ系にはない観念用法が見られ、またカク系列には現代語であればソ系で指示する対話の相手の発言を「カク」で示している。

（1） 恥づかしくあぢきなけれど、さのたまはんを心隔てむもあいなしと思すなりけり。（源氏・若菜上 p.88）
（上かせっかくああ仰るのを止め立てするの都不都合）

② 「いざ、いと心やすき所にて、のどかに聞こえん」など語らひたまへば、「なほあやしう。かくのたまへど、世づかめ御もてなしなれば、もの恐ろしくこそあれ」といふ若びて言へば（夕顔 p.154）（「ゆっくり語りあいましょう」「やはり変です。そう仰っても普通ではないおもてなしですから」）

²⁰ 岡崎（1999a）では、「カク（カウ）」に程度用法があるとしたが、他の用法を含めた上で「カク（カウ）」を観察するに、現代語の「コウ」が表しているような程度は、「カク（カウ）」は表せないと思われる。

(48) 御達,「あらはなり」と言ふなり。「なぞ, かう暑きにこの格子は下ろされたる」と問へば
(源氏・空蟬p.119)

しかし本論では,以下の①②点から合わせ考えるに,古代語ではカク系列「カク(カウ)」及びサ系列「サ」のみでは,程度を示すことができなかったと考える。

- ①古代語では指示副詞「カク・サ」に,程度を表すための形態「カバカリ(カクバカリ)・サバカリ」が存在する。つまりそれは,「カク・サ」のみでは程度を表せなかったため,程度を示す「バカリ」を付加する必要があったと考えられる。
- ②先の3.1節で指摘したように動作・作用の様態を表す用法において,「カク(カウ)」に使用場面の制約がないことから,現代語のA類に見られたような(18)の性質が古代語「カク(カウ)」には予想できない。なお現代語のA類の程度用法は,A類の(18)の性質からいわば副次的に生み出されたものである。

勿論,これについては更なる考察が必要であり,今後の課題としておきたい。

3.4 古代語のまとめ

これまでに述べてきた古代語の指示副詞の副詞的用法を表4にまとめる。

表4 古代語の指示副詞(平安時代)

古代語	指示副詞	動作様態	言語内容	程度
カク系列	カク(カウ)・カヤウニ (カク(カウ)サマニ)	●	●	×
サ系列 ²¹	サ(シカ)・サヤウニ	×	●	×

注:表の見方については表3の注を参照

表4に示すように,古代語のカク系列「カク(カウ)」には,現代語のコ系「コウ」に見られるような場面制約も無く,広く様々な対象を指示していたと考えられる。

また,サ系列に動作・作用の様態を表す用法が存在しないのは,岡崎(2002)で指摘したが,サ系列に直示用法がなかったのが大きな要因である。この点で,カク系列とコ系の性質の相違よりもさらに,サ系列とソ系の方がよりその性質に隔たりがあったと考えられる。

4. 指示副詞の歴史的変化及びまとめ

最後に指示副詞の歴史的変化について,大まかな見通しだけを述べて締めくくりとしたい。

これまで2節及び3節で明らかにしてきたように,古代語と現代語の指示副詞の間には,その用法・性質にかなり大きな隔たりが確認できる。ではなぜ,指示副詞は古代語から現代語に向かい,このように大きく変化していったのであろうか。

これについては,指示代名詞のコ・ソ・ア系への体系的な整備という歴史的な流れが根底にある。さらに加えて,指示副詞が指示する対象をより分析的に表現するという方向へ進んだと考えられる。

その結果,指示副詞は2系列(カク・サ)から3系(コ・ソ・ア)へと変化し,また指示副詞はバリエーション化していったのであろう。なお,この指示副詞が2系列から3系へと変化したのは中世(鎌倉・室町時代)以降であり,また指示副詞のバリエーションがかなり増えたのは,

²¹ サ系列「シカ」は築島裕(1963)で指摘するように奈良時代で盛んに用いられた語で,平安時代には「シカ」は衰退し訓点特有語となり,代わりに「サ」が多く用いられるようになる。なお,岡崎(2002)で述べたが「シカ」は「サ」と同じくサ系列の指示副詞であると考えているが,その用法・性質は同一ではない。

さらに遅い近世（江戸時代）以降である。

この指示体系の整備及び、指示副詞のバリエーション化については、指示代名詞との問題も含め、未だ残された問題は多い。

<参考文献>（[]は頁数）

金水敏（1999）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4（言語処理学会）[67-91]

金水敏・木村英樹・田窪行則（1989）『日本語文法わがマスタースーツ 4 指示詞』くろしお出版

金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15

（金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 1976 に再録 [7-26]

工藤 浩（1983）「程度副詞をめぐって」『副用言の研究』明治書院 [176-198]

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房

迫野虔徳（2002）「指示詞におけるコソアドの整備」『語文研究』94[1-12]

佐野由紀子（1998）「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3 [7-22]

築島裕（1963）『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』東京大学出版会

藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院

森本順子（2000）「副詞の現在」『新・文法用語入門 日本語学』4月増刊号 VOL.19 [120-129]

渡辺 実（1990）「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23 [1-16]

岡崎友子（1999a）「指示副詞の歴史的考察—「カク」を中心に—」文部省科学研究費研究成果報告書『明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式—落語資料を中心として—』（研究代表者：金沢裕之）[107-136]

岡崎友子（1999b）「いわゆる「近称の指示副詞」について」『語文』第73輯大阪大学国語国文学会 [42-52]

岡崎友子（2002）「指示副詞の歴史的変化について—サ系列・ソ系を中心に—」『国語学』

第53巻3号（通巻210号）国語学会 [1-17]

（資料）

『源氏物語』（小学館新編日本古典文学全集），『土左日記 更級日記』『竹取物語 伊勢物語 大和物語』『枕草子』『落窪物語 堤中納言物語』（岩波日本古典文学大系），『三四郎』『虞美人草』（夏目漱石・岩波文庫）『坊ちゃん』（夏目漱石・新潮文庫），『芥川龍之介』（ちくま日本文学全集）・『野菊の墓』（伊藤左千夫・岩波文庫）・『不機嫌な果実』（林真理子・文藝春秋）

NHK きょうの料理 平成14年6月13日放送（20：03～20：26）講師：松本忠子，アナウンサー：後藤繁榮
平成14年6月17日 放送（20：03～20：26）講師：小林カツ代，アナウンサー：鈴木聡彦